

「うつせみ」 (作 戸田成美)

登場人物

男1

少年2

少年3

東北地方のとある町の小さな公園である。遊具は全くなく、「空き地」と呼ぶ方がふさわしい。申し訳程度に置かれたベンチが一つと、申し訳程度の公園樹が二本、切り株と果てた公園樹だったものが一つ。

八月の甚だしい青空の下、男1、既にベンチに怠そうに座っている。ハンカチで吹き出る汗を拭い立ち上がると、手持無沙汰なように、辺りを見回しながら公園内をしばらくうろつく。しかしやはり何も無く、再びベンチへと戻り腰かける。

しばらく。

少年2・少年3、物凄い笑い声と速さで公園へ乱入。少年2は自転車をこぎ、少年3はその後ろを駆け足で追う。男1には気づいていない。少年2、自転車を降りて、

少年2 お前速すぎだよ！ 何で自転車に追いつけるのかわかんねえ。

少年3、息を切らしながら、

少年3 だってお前に置いていかれるの嫌だったんだもん。

少年2 何か勝ったのに悔しいわあ。あ、でも勝ったのは俺だからお前罰ゲームな。何がいい？ 尻文字か？ 逆立ちか？ 腕立て伏せか？ ぐるぐるバットか？ あ、バット無いかからその場で回るしかないか。でもそれじゃあ「ぐるぐるバット」じゃないな…
…ぐるぐる……うーん……「ぐるぐる」だな。罰ゲームにぐるぐるしろ！

少年3 ちよつと、ちよつとくらい休んでもいいでしょ？

少年2 何だよ嫌なのか？ 回るだけなのに。

少年2、その場で時計回りにぐるぐると回り始める。

それを見た少年3も半ば投げやりに反時計回りにぐるぐると回り始める。

少年2 おい！ これ思ってたより楽しいぞ！（回りながら）

少年3 本当だ！ ははははは！（回りながら）

少年2 いつ終わればいいのかわからねえ！ どうしよう！（回りながら）
少年3 気持ち悪くなってきたらでいいんじゃないかな！（回りながら）
少年2 じゃあストップ！

少年2・3、「ストップ」の号令とともに停止。少年2、よろけながら、

少年2 はー楽しかった！ すげえぐわんぐわんする。

少年3 何も見えない……ちよつと休もう。

少年2・3、その場に座り込んで息を整える。

少年3、視界が元に戻ったのか男1に気づく。

少年3 うわっ。……こんにちは。

男1 こんにちは。

少年2 何だ？ 誰としゃべってるんだ？

少年2、男1に気づく。

少年2 うわあ！ こんにちは！

男1 おお。こんにちは。

少年2、男1を怪訝に見ながら、

少年2 ……おじさんいつからいたんですか？

男1 君たちが来るちよつと前からいかな？ あとおじさんまだ二十代なんだ。

少年3 ずつとそのベンチに？

男1 そうだね。

少年3 ……つてことは……。

少年2 見られてたのか……。

男1 いや、こっちこそ黙って見ててごめん。

少年3 いえ、いいんです。でもこんなところで大の大人が何してるんですか？

男1 ああうん。おじさんの方がましだったな。大の大人は仕事したくなかったので気分転換に came ました。

少年3 気分転換？

男1 何か、もう一人の同僚は体調不良で休みだし、社長も具合悪いって言って午前中で早退しちゃったんだよね。今会社に俺しかいなくてさあ！ まじウケるな、何だこの会

社？

少年2 社長の言い分けは絶対する休みする時のやつだと思う！

男1 あ、やっぱりそう思う？

少年2 俺も同じこと先生に言ったことある。

男1 ……君きつと良い社会人になれるよ。まあそんなことはどうでもよくて。君たちは何しに来たの？

少年2 見てたんだから分かるだろ。

男1 ぐるぐるしに来たのか。……え、それだけのために？

少年3 違います。

男1 冷静に否定されると結構悲しいよ。

少年3 ここにいつも遊びに来てるんです僕たち。この公園何も無いけど、まあ、何もしいよりはましかと思って。だから来たんです。

少年2 自分のことみたいに言ってるけど友達になって最初にこの公園で遊ぶ提案したの俺だからね。

少年3 でも今日ここで遊ぼうって言ったのは僕だよ。

少年2 ちょっと前までは滑り台とかブランコとかあったんだけどなあ。

男1 そうだったんだ。公園があるのは知ってたけどそこまでは……。

少年2 ふふん。

男1 夏休みもそろそろ終わるし宿題も終わって遊び放題って感じなのか。いいなあ。

男1の発言を受けて少年2、半ば激昂しながら、

少年2 終わってるわけないだろ！

男1 おおびつくりした。君溜め込みそうだもんね。ごめんごめん。

少年3 (少年2に対して) ……あとどれ位残ってるの？

少年2 えーっと、一行日記は八月入ってから全然書いてないし、算数スキルも文章題とエックス使うやつは全部飛ばしたし、読書感想文の本も買ってもらったけど読んでねえな。

少年3 夏休みあと何日だっけ？

少年2 五日。

少年3 あのさあ……。

少年2 お前どうせ終わってるんだろ？

少年3 ああ、うん……まあね。

男1 夏休みに色んなことできるのも今のうちだよ。

少年3 でも結局秘密基地作れなかったなあ。

少年2 夏休みが終わらなければ宿題しなくていいのになあ。

少年3 やっぱりそこ？

男1 やりたくない気持ちはわかるけどね。俺もそうだったし。

間。耳を澄ますと蝉の鳴き声が遠く微かに聞こえる。

少年2 (男1に対して)なあ。あ、ねえ。

男1 何？

間。

少年2 どうやったら夏休みって終わらないんですか？

間。

男1 え？

少年2 なんかこう、超能力バーン！とかタイムマシンイーイー！とかじゃなくてさ。

もつと普通に「夏休みが終わらない方法」ってねえの？

男1 そんなこと俺に聞かれてもな……。

少年3 すみません。

男1 夏休み……。 「夏休みっぽいこと」をずっとやり続ければ良いんじゃないか？

少年2 おお！ 例えば例えば？

男1 例えばそうだな……。 ずっと海で泳ぎっぱなし。

少年3 クラゲの餌食じゃないですか。

男1 ずっと肝ためしっぱなし。

少年2 幽霊と友達になれそうだな！

男1 ずっと花火打ち上げっぱなし。

少年3 もはや空襲と勘違いしちゃいますよ。

男1 ずっとお墓参りっぱなし。

少年2 ひいばあちゃんやっほー！

男1 よし、じゃあさっそくやってみよう。俺花火するー！

少年2 じゃあ俺お墓参るー！

男1 意外と渋い趣味してるな。(少年3に対し)君は？

少年3 ひいばあちゃんになります！

男1 何？ 昨今の子供たちの間では終活が流行ってるの？

少年2 それじゃあ「夏休みっぽいこと」よーい……スタート！

「スタート」の号令とともに三人それぞれ宣言した振る舞いをする。

男1は花火を打ち上げる動きではなく打ちあがる花火の動きと音。少年2、切り株を墓に見立て墓参りをしている。少年3、切り株を挟んで少年2の向かい側に立ち少年2を見守っている。

しばらくして男1が耐えかねたように、

男1 あー終わり終わり！これ大分無理があるわ。

少年2 うーん……夏休みっぽかった気がするけど……。

少年3 結構楽しかったですけどね。

などと言いつつ、三人元の体勢に戻る。

男1 今のが？今のが？……何ていうか自分から提案しておいて何だけど、こういうのは夏休みにやるからこそなんだろうな。夏休みっぽいから夏休みにやるんじゃないかな。夏休みにするから夏休みっぽくなるっていうか。

少年3 それっぽく言えばそれっぽくなると思ってるでしょ。

男1 こ、子供に凶星を突かれるとは……うーん……。

男1、再び考え込む。少年2・3も続く。

男1 あくまでも「夏休みが終わらなければ良い」んだよね。

少年3 そうなりますね。

男1 ……これは逆に言えば「学校が始まらなければ良い」ってことになる。

少年2 おお！それっぽい！

男1 学校と言えば先生。宿題を出すのも？

少年3 先生です。

少年2 分かった！先生が学校に来なければいいのか！

男1 それができればベストだ。だが……学校という諸悪の根源に魂を売った教師をやすやすとそう仕向けるのは難しいな……。

少年3 学校に何か恨みでもあるんですか？

男1 学校が始まらないためには、俺たちが俺たちの手で何とかするしかない。

少年3 冷静にスルーされると結構悲しいですね。

少年2 ……あー！分かった！

男1 今度は何だ？

少年2 宿題が終わらなければいいんだよ！

少年3 どういうこと？

少年2 夏休みを終わらせないようにするには、夏休みっぽいいんだよな。

男1 ああ。理論上はね。

少年3 今かっこつけました？

男1 君さつきから何なんだよ！ かっこつけたよ！ もう！

少年2 夏休みっぽくて、しかも夏が終わっても手元に残せるものっていったらさ、それってやっぱり「夏休みの宿題」じゃね？ 紙だし、ずっと自分で持ってるし。

少年3 ああー……？

男1 ということは……「夏休みの宿題」をやらなければ……！

少年2 夏休みも終わらない！ よっしゃ解決う！

間。

少年3 どう考えても無理がある……。

少年2 や、やっぱりだめか……。夏休み……せめて日本がずっと夏だったらなあ。

男1 ずっと夏だったらずっと夏休みって寸法か？

少年2 うーん……うーん……。

少年2、公園内をうろろし始める。一見とても真剣に考え込んでいる様子である。

少年3、少年2の様子をじっと見ている。三人の間に飽和した空気が流れ始める。

少年2 あーもう！ 何も思いつかない！

男1 行き詰まりか……。

少年3 お前「宿題をやらなければ夏休みも終わらない説」はあんまりだよ……。

少年2 真面目だなあお前。

少年3 いやそうじゃなくて。

少年2 なんだよ。

少年3 お前の言う通りだと僕、夏休みそのものが無くなっちゃうんだ。

少年2 え？

男1、ハンカチで汗を拭いながら、

男1 なんか一回、別なことしようか。

少年3 ……別なことって？

男1 ほら、全然関係ない別なことをしてる時にポンッと名案が浮かぶ……みたいな話あるでしょ？

少年2 ああ、テレビでそういう話観たことある！

男1 何がいいかなあ。

男1、公園内を歩き回り、木や切り株の根元を中心に何かを探し始める。ベンチの脚元で何かを見つけ、手に取ると少年2・3の元へ戻り、

男1 宝さがしにしよう！ んで、探してもらおう宝はこれ。

と蟬の抜け殻一つを掲げる。

男1 ちなみにヒントは出しません。この公園狭いし隠す場所少ないし。

少年2 よりによって宝さがしかよ？

少年3 久しぶりだなあ。保育園の時以来かも。

男1 ほら、じゃああっち向いて。俺が「いいよ」って言うまで振り向くなよ！

男1、少年2・3を公園の外側（客席側）に向かって歩かせ、公園樹と切り株の間に一人ずつ立たせる。男1、蟬の抜け殻を隠す場所を模索している。蟬の鳴き声が耳につく。

少年2 （少年3に対して）なあ。

少年3 ……あ、僕？ 何？

少年2 さっきのあれ、どういう意味？

少年3 あれって？

少年2 夏休みそのものが無くなるってやつ。

少年3 ああ。……あれはただ、そもそも僕には夏休みの宿題が無いって意味だよ。

少年2 え？ 宿題が終わったんじゃないって？

少年3 うん。

間。

少年3 僕、夏休み終わったら転校することになったからさ。だから、今の学校でもらった宿題やらなくてよくなっちゃったんだ。

間。

少年2 あ……ああ。そうなんだ。……え、夏休みってあと何日だっけ？

少年3 五日。

少年2 あのさあ……。

少年3 言わないとなって思ってたんだ。でも一緒に遊んでるといつ言えばいいのか分からなくなっただんどん言いがらなくなっちゃって……。だから、すぐ今更なのは分かかってただけで今日こそは言おうって思ってた僕から遊びに誘ったんだ。この公園で言おうって決めて……。ごめん。

少年2 ……。

少年3 夏休みが終わったら転校するって決まってるから、夏休みが終わるのが嫌で嫌でしようがなかった。どうやったら夏休みって終わらないんだろうって、そんなありえないことを一人でずっと考えてた。そのせいもあるのか分からないけど、お前と遊んでる間、夏休みって終わらないんじゃないかなって錯覚し始めてる自分がいてさ。馬鹿馬鹿しいよね。

少年2 ……。

少年3、苦笑しながら、

少年3 しかも今日、今まで考えてた「夏休みを終わらせない方法」について本当に話し合うことになって。錯覚じゃなくこれは実現するんじゃないか？ って思ったせいで今日も言えるかどうか怪しかったんだ。ははは。やっと言えた……。

間。

少年2 何がいい？

少年3 え、何が？

少年2 罰ゲームだよ。宝さがして先に宝を見つけた方が勝ち。で、負けた方は罰ゲーム。あと今まで転校すること黙ってた分は絶対お前に罰ゲームやってもらうからな！
何がいい？

少年3 ……そうだなあ。僕は……。

男1の声が少年3の回答を遮るように、

男1の声 いーいーよー！

少年2・3が勢いよく振り返ると、男1の姿は既に無い。二人は一瞬戸惑うが、ひとまず、と宝を探し始める。だんだんと蝉の声が大きくなっていく……。しばらく。

二人の声は蝉たちが声を限りに鳴いているせいで聞こえない。

少年3が宝を発見する。少年2は反時計回りに、少年3は時計回りに「ぐるぐる」。何回転かしたのち、少年2の「ストップ」がかかったようで、二人停止する。少年2、ふらつく足で自転車へ向かう。少年3もその後が続く。少年2は自転車を押しながら少年3と共に会話を交わす。仄かに伸びた影たちを落としつつ彼らは公園を出た。誰も居ない公園に、蝉時雨がなお一段と降りしきる。

終